松川町地域産業推進協議会　第４回企画委員会　会議録

日時：平成 24 年５月 31 日（木）
午後６時 00 分～８時 00 分
会場：松川町役場　２階　大会議室

第４回目の企画委員会を開催。

今回は、各部会毎で第１回目と第２回目のワークショップで提案された提案事業を振り返り、協議会に提案する事業を整理しまとめるところまで行いました。

各部会でまとめられた提案については、次頁以降へ記載します。

○農業部会

これまでの提案	「清流苑」をプロデュース ・清流苑から新井商店街へのアクセスをよく。 ・温水の２次利用として、施設栽培を模索してどうか。 ・町内の農産物を利用した食のコンテストを開催して、最優秀賞の料理をレストランで提供してはどうか。 ・直売所へ良い商品をと機会ある事に言っているが、改善されていない。 ・本年度、松川町民と自然にやさしい農業連絡会主催の立ち木検討会代表園地の贈答用りんごを展示させていただいたが、とても好評であったと聞いている。 ・ゲームスペースの利用者が少なく感じる。松川町の農業の歩みの写真、書道・手芸品などの芸術作品の展示などに活用できないか。 「みらい」の新たな展開を模索 ・観光客の滞在時間を延ばす取り組みとして、地元の農産物を利用した農家レストランがあってもよい。 ・「みらい」は農業者の利用が多いが、商・工業者がどのように利用しているかが分からないが、もっと活用してもよいと思う。 町民参加型のイベント ・くだもの狩りの観光客の松川町への滞在時間を伸ばすための施設や工夫が必要。 ・京都の激辛サミットがあると聞いた。町をあげてのサミットを開催してはどうか。 ・軽トラ市、やたい村など、気軽に参加できるイベント。 労働力補完と新たな働き手の模索 ・１件の農家当りの栽培面積が増えている事もあり、労働力の確保が急務。シルバー人材センターのように、老人ホームやボランティアの方にお手伝いをいただく。 ・福祉(健康)と農産物の栽培の結びつきを行い、食の大切さを知っていただく。減農薬、有機栽培など。 人の流れを生む企業誘致 ・他の市町村の事例を参考にして企業誘致を行ってほしい。また、農業と相乗効果があり業種であれば更に良い。 ・企業誘致が多くの雇用を生む事で人口が増え、結果的に地元の農産物の消費拡大につながる。 地産地消への理解と浸透 ・町内の飲食店が地元の農産物を積極的に取り扱っていただけるような環境の整備。 ・まずは外への発信の前に地元の方へ町内産農産物の良さを知っていただけるように情報発信や取り組みが必要。 ・○○さんが作ったお米など、産地でなく生産者の氏名で食事を提供している居酒屋があると。

これまでの提案	・農業分野では地産地消を聞くが、工業分野では地産地消はほぼ無い。常に日本のみならず、世界に目を向ける事が大切と感じる。 加工業の充実（味の里への期待） ・町のお土産がりんごを始めとした青果が中心なので、お土産のラインナップを増やす。 ・加工品の新開発（例えばりんご酢、りんご茶など）。他の産地に行き参考とするのも方法の一つ。 ・加工工業の活用と生産者の交流と、技術のレベルアップ。 新井商店街との交流 ・町民の新井商店街の利用度はどの程度か？マーくんカードの利用実績を活用してみてはどうか。駐車場がなく、立ち寄り難い印象を受ける。 ・“松川せんべい”“うぐいすもち”など過去に名物商品があった。復活できないか。 ・空店舗の活用で連携（例：早稲田商店街では空店舗で食堂を営業し、残渣を堆肥化し、無償で地元農家へ配布。農家で採れた野菜を食堂に提供と、連携が図られている）。 農業の課題と新たな展望 ・ＪＡの助成事業は改植した場合のみの対象であるが、遊休農地に新たに作付けした場合などを対象とすべき。 ・飯島町ではコテージに畑を付けて貸し出しを行っているが、町でも検討を。 ・循環型農業 ・発電ができる除草シートが開発された。電気の地産地消も考えるべき。 ・ソーラーや水力発電を活用して、施設栽培を研究できないか。 ・町単独の産地呼称制度の創設など、物を作る強みがあるのが農業なので、高く売る仕組みを作って商業が売る。 ・ＴＰＰには中立的な立場。 ・ＴＰＰについて、工業は賛成な立場。ＪＡとして反対の立場を示しているが、メリットとデメリットの洗い出しをして、複合的に検討すべき。 ・個人の農家では規模に限界があるので、法人化が必要。 ・工業的な発想で、３交替制などを導入して生産効率を上げてみてはどうか。 ・直売所は農家であって小売店と考える。商工会に加入して一丸となりＰＲをしていけたらと考えている。 ・原価管理など経営面において農業分野は不透明な部分が多い。お互いに抱えている問題点を共有することが必要と考える。 ・農業が抱える問題解決の糸口として、品質管理部分なら現在の工業の技術力、販売部分なら商業の販売力、人員の確保なら法人化と各得意分野を活かしていきたい。 情報発信 ・“ツイッター”、“facebook”など最新の情報発信ツールの活用。 ・町をあげて観光客へ〝おもてなし〟をするという雰囲気作り『WELLCOME』。

	その他 ・「くだもの狩り」、「清流苑」、「新井商店街」と観光客が循環するシステムを、タクシーやバス会社などを含め検討してはどうか。（飲食店街巡り） ・統一感・一体感ある町づくり。木曽路や小布施のように案内看板の統一などできることから。 ・物を作る
整理し、まとめる	・今回の企画委員会ワークショップのように、農商工それぞれ人と人との情報交換の場を持つこと。 ・ツリーハウス、コテージ、いろりの小屋等を造り、宿泊と併せて農地の貸出を行う。ツイッターなどでＰＲする。 ・ぺっかん等のイベントに農業も参加する。イベントサミット。町民が興味を持つイベントの開催。 ・統一感のある看板、ガードレールの統一を行政ではなく、町民が行う。インターを降りてからの案内看板の作成。季節ごと変化する看板には興味がひかれるのでは。 ・インター→新井→生田→清流苑など人の流れをつくる。 ・インター降りてからの統一的な景観整備を行う。 ・学校給食で松川の農作物を出す。これからを担う子供たちへの意識の向上を図る。 ・中学校でも町産の食べ物を提供する。 ・農商工お互い理解するためにも、農商工それぞれの資料をつくる。 ・お互いの現場に行き、仕事の説明を聞けば理解できることも多くあると思う。 ・松川町に来たなと思われるような病院、駅等公共施設に統一的な看板を作成する。 ・地域をあげてのあいさつ運動を実施し、活気のあるまちづくりを行う。
提案を決める	・そもそも農商工お互いの話し合いの場が必要であり、話し合いが農工商連携である。 ・町のイメージとしての方向性として、統一的な案内看板、同じイメージの看板を設置する。あいさつ運動等行う。最終的には、看板コンテストとかしてもよいのではないか。

○商業部会

これまでの提案	遊休農地対策 ・都会からのリタイアした人たちを呼び込み、セカンドライフのための定住対策として遊休農地を提供して活用してもらう。 ・自然豊かなことを生かした林間教室等で、小学生から高校生の更なる受け入れを検討する。 ・遊休農地で野菜を作りＰＲしていく。 ・コテージ、山小屋をクラインガルテンやオーナー制ではなく貸出方式にして、遊休農地で野菜作りなどをしてもらう。都会の人が自然を感じられる形。 エネルギー ・水力発電特区の申請として水力発電を積極的に行い、地元の工業の力を使う。遊休農地の水田を使う。 観光 ・観光農園にたくさんのお客が来ても昼食などの受け入れ先がない。大型観光バスの対応ができるくらいのレストランを作る。 ・誘客のターゲットを大型観光バスにするのか、個人にするのか方向性を出す。 ・「みらい」で朝市、テント村を開催。とにかく「みらい」を活用しないと今のままでは大きな事務所があるだけ。 ・「みらい」で○○狩り、○○体験などのイベント企画を行い、観光の窓口として前面に出る。 ・「みらい」に販売スペースを設け、レストラン設置。 ・直売所を拡大し、生産者と販売者をそれぞれのプロに任せる。 ・リニアの駅から専用バスを出し、広域農道の景色の良さをＰＲ。 空き店舗 ・特産農産物を空き店舗で販売 ・空き店舗をブースのように区画して貸し出し、新鮮野菜コーナーなどの設置。お土産と一緒に販売。 ・空き店舗を使った地元の人が食べられる食堂があって、新たにメニューを作るのではなく、地元にあるものをＰＲ。 まちづくり ・まちづくり機能の外部委託化として、まちづくり的なものを外部に委託するなど役場の外につくる。 ・「交流センターみらい」を連携のシンボルとして活かす方法を考える。 ・農商工連携システムの構築というテーマはかなり難しく、実現するにはＪＡを取り込んでいくことを考える。 ・松川町民が松川町を知らないことが多いことを感じるので、松川町再発見イベントの開催を企画する。

これまでの提案	・工業が農業へ参入できる仕組み作りを考える。 ・町民が地域発展のために動いてもらい、点ではなく面で動くことを考える。 ・インターが近い農園は他になく、訪れた方たちが新井へ下りて生田へ行く循環作り。 ・商業の活性化は新井商店街の活性化がポイントになる。 ・「清流苑」とインターを直結し、ハイウェイオアシスにする。 ・インターがあることを生かしたショッピングモール、商店街を作る。 ・町外からの誘致ではなく、松川町の商店だけが入れるショッピングモールの建設。町に任せきりではなく、建物（ハード）は町が作るがテナント内容等の工夫（ソフト）は商店が考える。 ・定住のターゲットは若い人とするのか、高齢者とするのかで対策が変わってくる。 情報発信 ・セカンドライフタウンの建設として、松川町に行くと素晴らしいセカンドライフが待っている施策を考える。特に現役が短いスポーツ選手などをターゲットにする。 ・口コミで人を呼ぶ仕組みを構築する。例えば“facebook”などを活用し、個人個人のつながりを活かす。 ・農産物のブランド化を推進するためのタイアップ企画を考える。 ・農産品認定制度の制定。 ・松川町には素晴らし観光農園が多いが、扱っている種類だけでなく、例えばりんごの甘さ、硬さなどの特性などを明示したマップ“農園の味マップ”を作成し、観光客の呼び込みに活用。 ・テレビ局に働きかけ、中央のドラマの舞台として利用してもらうことで必ず誘客につながる。 ・マスコミ等を活用した徹底した情報発信を行い、松川町の認知度を上げる。 ・空き店舗の活用として、趣味の家などをしてくれる人を町外から幅広く募集をする。 ・松川町のみの観光だけでなく広域的に考え、近隣の市町村の観光情報を熟知して利用し、信州に来る際には松川町にも寄ってもらえることを考える。 ・週１回程度の定期的な農産物の青空市開催。 ・松川町の農産物のブランド化を推進するためのタイアップ企画。 ・ハード的なもので言うと少しの名所を作ってもＰＲにはならないが、他にはない規模の物を作ればＰＲになる。何をするにしても資本が必要になる。 ・松川町の魅力は何か。Ｉターンした方たちからの話を聞くと参考になるのでは。 その他 ・農業と商業は結びつきやすい。 ・無理に工業と商業を結び付けず、自然に結びつくのが良い。 ・葬儀屋を町で創設しＪＡと連携。地元のもので運営し地産地消を促す。 ・葬儀場は地元が循環する良い発想だと思う。 ・良いものも安く売るのではなく、良いものは高く売ることにこだわる。 ・良いものが売れるのではなく、売れるものが良いものである。

	・地場産業＝(イコール)農産物、海産物の発想から転換をする。工業製品を売り出しても良いのでは。 ・人口増対策が商店街活性化へ直結される。町としての今後のビジョンを明確にすべき。 ・町から商店街活性化のための補助を出しても良いが、出し方を工夫すべき。貸し付ける形も検討。または補助金交付ではなく一般からも投資を呼び込み、赤字補填は一切行わない。 ・学校の誘致 ・中高年が親の介護のために仕事を続けられないことが全国的に問題になっているので、高級完全介護の特別養護老人ホーム（最後の楽園的）を建設。老人が集まれば地元の業者からの納品、病院、介護者等の人が寄ってくる。 ・個人商店は大型店とは違ってお客様の家族構成や間取りまで分かる。言わば顔が見える商売が強みだったが、若い人はドライで安ければ良いと言った志向であり、ネット等で言葉を交わさずに買い物ができる時代なので、商店で買い物をしてもらうこと自体が危うくなるかもしれない。
整理し、まとめる	【遊休農地対策】 ・飯島町七久保の定住が盛んである。松川町の受け入れ体制の精査。 ・マルチハビテーション（週末は田舎で過ごし、平日は都会で過ごす）が流行っている。梅松苑の活用。 ・都会の人が田舎で住むのは憧れるだけで、生活スタイル、車が必要など実際は難しい。下條村も若者が増えているが、子育てが終わったら都会へ戻るかもしれない。都会の方が居心地が良い。 以上より高齢者をターゲットにせず、定住も目的にせず、休日に来てもらい、農業をやってもらう程度が良い。何もないことが逆に良く売りにする。ただ買い物ができるくらいの設備は必要。 ・おむすび券型循環型経済＜地域通貨＞の導入を商店街で考えている。 農が米作り、商が券を売る、工が印刷請負、スポンサー スポンサー料の範囲内で米をつくり券を売り、収獲祭で購入者が地元産を購入する。 【エネルギー】 無理があるため取り下げ

整理し、まとめる	【観光＆空き店舗対策】 ・テント村などをみらいで行う。 ・空き店舗で物販を行い、店までの誘導看板の整備を行う。←大鹿に行く人が通る町の道なので、呼び込まない手はない。 ・行政の出先機関を旧ハトヤへ置き、『まちなかインフォメーション』とする。 ・今あるものを利用して販売へつなげる。 【まちづくり】 ・松川百景地図の作成。（この季節にここに行くと良いと言ったポイントを集め地図化） ・駐車場の状況が現在道路の裏手にあり私用化も目立つ。ただ、他の地域に比べて無料でそれなりに広い駐車場環境でもある。 【情報発信】 ・松川町の物産のブランド化。認証化。特に農産物はゴールドラベルなど他のものとの色分けをする。
提案を決める	【遊休農地対策】 ・おむすび券型循環型経済＜地域通貨＞ 【観光＆空き店舗対策＆まちづくり】 ・空き店舗を利用した物販。 ・地域づくりの拠点を商店街へ ・町百景の地図化。 【情報発信】 ・松川町の物産のブランド化。 ・認証化。

○工業部会

これまでの提案	地産地消 ・道路整備などのインフラ整備も地元を活用すれば雇用の確保にもなる。 ・遊歩道だけでなく、片桐松川沿いにオートキャンプ場を整備することや薪割り体験など自然を生かしてはどうか。 ・クラインガルテン等、インターに近く有利ではないか。 ・森林整備を兼ねて、薪ストーブ愛好家を全国から呼ぶ。 自然エネルギー ・公共施設や工場の屋根を借り、ソーラーパネルを設置し、売電する。 ・建築基準法でソーラーパネル設置義務化。 ・ソーラーシートを遊休農地に設置すれば、除草がいらない。 ・自然エネルギー特区申請をする。100％電力自給する町に。 ・河川利用の発電施設や発電技術を開発する。 ・自然エネルギーの活用、タイアップしたらどうか。 ・飯田市下久堅のような自然エネルギー体験型の家『風の学舎』を作ったらどうか。 特産品 ・ブランド認定の評価・支援、基準（安全・安心）、管理はできる。 ・バイオ技術を活用しエビを養殖したらどうか。加工でき需要がある。 ・栄養価の高いクルミを使ったチョコレート。保存が効き、お土産に最適。 ・おいしい水、空気を使った都市型農業。価格・設備が課題だが、バイオ技術を活用し水耕栽培はどうか。 ・ドライフルーツは加工品として最適。 ・片桐ダムにいる外来種レイクロブスターを活用。 ・ジンギスカンが多いのはこの地域の特色。焼肉のタレにも果物を入れる習慣がある。 ・ワイン特区にしたらどうか。りんごワイン、シードルは世界的に人気があり世界から人を呼ぶ。 ・輸入できる農作物を作る。 ・ウナギの養殖 宣伝 ・インターから客を降ろすことが重要。それには客が何を必要としているのかマーケティング調査、来てもらう仕組みづくりをする必要がある。 ・松川町だという景観は魅力となる。 ・インター近辺に大きな商業施設（売るところ）が必要。 ・他地域の商業施設とタイアップ（ブースを設けるなど）したらどうか。 ・サインボード（看板）の統一

これまでの提案	福祉 ・福祉は需要があり、有料福祉センター（グループホーム）を作り、全国から募集する。雇用も生まれ、居住食に医療も必要となってくる。 その他 ・カジノで活性化 ・本来は活性化して税金がしっかり払えるのが望ましい。町が呼び水で税金を投入することは必要。 ・農地と工場用地（非住宅地）を同評価とする。（農作業場と工場・倉庫は同じ用途に） ・交流センターみらいの活用（過去の写真などを展示） ・水車のある風景はとても良い。 ・町出身のプロスケーターのプロデュースしたアイテムを設置する。 ・清流苑近くにドックラン施設を作ったら、ペットからの交流ができる。 ・海外でのイベントは道路を使うが、道路使用に制限が多い。簡単に使用出来ればいい。
整理し、まとめる	・１人あたり所得を見ると工業が農業に手助けするとの見方も出来る。 ・みんなの収入が増えればいいのではないか。 ・ソーラーパネル設置するのであれば、外の企業に任せては駄目。すべて持っていかれる。最低限避けるべき。 ・孫の代がちょっと豊かになれば、それで良い。 ・工業化した「食」、ソーラー等自然エネルギー特区の「環境」、福祉等少子高齢化がキーワードになる。 ・外から外資を取り入れ、地域で金が回るのが理想。 ・今ある資源をどう活用すべきか。観光資源等含めて… ・農業が作って、工業が加工して、商業が売る。そして行政がＰＲする構想で良いのでは。 ・農商工連携は誰がリーダーになるのか。ある程度パワーがいる。 ・果物狩り等人が来ていることは、農家は知っている。その情報を活用できないのか。 ・商業施設を一箇所にしたときに、地域の店がなくなることが心配される。 ・インターネットが便利で店頭に行かず、物を買っている現在、顔の見える商売として商店街はセーフティネットとなる。 ・リニア新幹線開通で間違いなく墓地探しに来る人が居る。 ・クラインガルテンは面白い。ただし、成功と失敗が極端である。 ・秘境というにも、中途半端になっている。 ・自然・資源を生かしていく必要がある。 ・フリーズドライ保存が効くため好まれる。りんごの漬物等時期をずらしても売れるものを。

	・これから高齢者でない単身者が増える。その方を対象にした住宅。 ・「農」と「商」は繋がりやすいが、「工」はベクトルが違う。ソフト面で係われるが。
提案を決める	まず、工業は、農業・商業の抱えている課題をソフト面で支える。 地域資源を軸にした連携方法が重要であり、これからの方法論を提案する。 連携の根底には人間関係も必要であり、人作りも重要なキーワード。